

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発行
令和三年三月一日発行（第四百二十四巻第三号）

ホトトギス

三月号



風雅の小筥〔三十八〕

廣太郎

俳句会のマナー、というの少し大袈裟かも知れないが、以前私が選者として伺っていた句会があり、兼題句会で、事前に兼題が発表されていて、もなかなか句作が出来ずに、当日会場で句作する事もあるが、その日も会場で句作をするべく、着いて歳時記等を用意すると、メンバリーの一人が御挨拶に来られた。勿論ほんの一言で、その方は席に戻られたが、それを御覧になった他のメンバリー二十人程がほぼ全員私の席まで来られて御挨拶をなさった。勿論御丁寧な事で私もその点では嬉しい限りではあったが、この時私は未だ投句どころか句作もしておらず、少し焦る気持ちもあった事は確かである。締切時間まではたつぷり時間があり、投句に間に合わなかつたわけでも無かつたが、集中して句を考える気持ちが緩んだのも事実だ。まあ私のはつきりと句作をした旨を伝えなかつたのも責任があるだろう。

ただ反対に、人の発した言葉が句のヒントになつた事があるのも皮肉な事で、もう十年以上も前の吉野山で、残念ながら花が終わってしまった時、俳句とは無縁の花見に来ていた人が

「花はあと三百五十六日待たなあかんな」と話しているのを聞いた時即座に詠んだのが
あ　と　三　百　五　十　六　日　待　つ　桜　廣　太　郎
という句であり、手前味噌で恐縮ではあるが、その日の句会で、汀子の大特選であつた。まあケースバイケースといえればそれまでであるが、どれだけ句作に集中出来るかが大切な事だろう。

旬日記 汀子

令和二年三月一日 下萌句会

収まらぬもの春塵と疫病と
目の前をよぎりし影を燕とす

三月二日 ロイヤル俳壇

誰彼の健康案じぬし弥生

収束に迎ふ話題を待つ弥生

春めくも心に添はぬことばかり

早々と好きな三月来てしまふ

健康に勝るものなし弥生来し

三月七日 芦屋ホトトギス会

山と海 近き芦屋の春の川
菊根分だけして帰る庭師かな

来し友にせめて暖かかりしこと

マスクして誰が誰やら目が笑ふ

あたたかき風に目覚めて行く命

三月十日 大阪倶楽部

流れ来る曲水の意を待つばかり

春雷の遠ざかるより気づきたる

世の中の動静告げて春の雷

三月十六日 朝日カルチャ

欠席の多きを覚悟 春寒し

出席を問はぬ春寒なりしこと

健康に勝るものなしあたたかし

三月十六日 祝「笠寺」六百五十号

重ね来し日々なつかしくあたたかし

三月十七日 無名会出句

海近き町に住み馴れ山笑ふ
空晴れて木々の芽吹きをうながせり

我が庭の芽立ち如何と一巡り

三月十八日 夏潮句会

咲き初めし庭の桜を見て安堵

雪柳咲き客を待つ心かな

花の旅近づく予定あるがまま

桜咲き初め遠巡もなく案内

桜咲く空気を吸ひて寿

咲き初めし存在となる桜かな

花の旅たとへ一人にならうとも

三月十九日 有恒俳句会出句

地に下ろしたる牡丹の芽たくましく

家居してあたたかきこと勿体なく

花の色未だ明かさぬ牡丹の芽

三月二十七日 時雨句会

小さくとも雛片付ける手順あり

結局は揃ふ顔ぶれ山笑ふ

三月二十七日 アネモネ句会

前向きに見れば見る程春めきぬ

何もかも春めく予定組まれゆく

卒業の後の予定を問はれけり

靖国神社献詠句

廣太郎句帳

廣太郎

令和二年三月五日 蕉心会

日の本の明日を信じて地虫出づ
啓蛰のそはそはしたる都心かな
鳥曇 払ひて帰りゆく数羽
隅田川故郷めいて水温む
雪柳川 風に色磨かれて
すくと立つ雉の足の冴返る
鳥雲に入るを促し波尖る
蝌蚪の紐水惑星を持ち上げて
三月七日 芦屋ホトギス会
驚一羽春田の景として孤高
初孫の節句に呼ばれ暖かし
大試験終へて恋人出来し我
三月八日 野分会菅屋例会
春火桶 昭和の火種 弾けをり
はんなりと京風 雛の官女かな
雛の目明治を語りをりにけり
三月八日 青嵐会菅屋例会
蟻穴を出づれば象の前に居り
北窓を開けば明日の待つてをり
北窓を開き富士の余所余所し
北窓を開きローストビーフ焼く
地虫出づ活断層を宥めつつ

三月十二日 土筆会新冠コロナウイロスの為選者選のみ

引鴨に引力消えてゆきにけり
水温む地球表情歪めつつ
玉椿 病める地球を救ふかに
三月十六日 北國文芸選者吟
自然とは神の摂理や春の風邪
三月十九日 前議員句会

恐ろしき名を持ち春の風邪流行る
蛇穴を出でて空気の変わりけり
国挙げて大試験てふ枷となる
花ミモザ首都の表情和ませて
三月十九日 登高会
天国の君の便りか董咲く
耕や土の囁き聞きながら
鳥雲に入りて現世遠ざける
董咲く宝ジェンヌに恋せし日
耕して地球の裏を垣間見る
耕して百万石を守る城下
鳥雲に入る人間は閉ち籠る

三月二十日 廣邦会
灯を消せば 蜩 呷く 厨かな
初花に雲 退いて ゆく 速さ
三月二十日 青嵐会東京例会
ボール蹴る初老の紳士 風光る
初花に人疎らなる古利かな
一片に誘はれゆく落花かな
うららかに外つ国の人失せにけり

一輪の蒲公英に首都明けてゆく

三月二十二日 野分会東京例会
早世の父はホワイトデー知らず
春火桶抱へ 隠居は百二歳
三月二十四日 若水句会コロナ禍で投句後選

剪定や稲城野に空近付けて
涅槃図や世界の嘆き受け止めて
土筆野の未来に向かひ子等走る
指先に緊張集め土筆摘む
脚立出すより剪定の目差に
土筆野の起伏に子等の見え隠れ
高僧の来て涅槃会 の畏まる
三月二十五日 目黒学園句会

摘草や病める天地を宥めつつ
朝霞霽れて富嶽の立ち上る
朝霞消えて吉野は満開に
人居らぬパチカンの鐘霞みたる
摘草に微笑み返す野の起伏
三月二十六日 カトリック新聞選者吟
春光の先に希望の確とあり
三月三十日 朝日カルチャー若草句会

若鮎に大琵琶の水微笑めり
夕東風に菌に急かされ早仕舞
人生の伴侶落第して出会ふ
若鮎の早翻ること覚え
校門の柱を撫でて卒業す
若鮎に水底は未だ遠過ぎる

雑詠 廣太郎 選

葱は青味 噲は白てふ京女 奈良 古賀しぐれ
 世話好きの浪花女は青葱派 同
 酒好きの東男は白葱派 同
 新酒の香供へ忌心 静心 福知山 松山牧子
 名園の末枯といふ気品あり 同
 職を退き曜日忘れてうそ寒し 同
 霜月や時の流れに逆らはず 東京 今井千鶴子
 夫逝きて十一年や夜半の冬 同
 わが生のひとつき惜しみ夜半の冬 同
 余裕ある乗換駅や秋涼し 長岡 安原 葉
 洛北に偲ぶ若き日草紅葉 同
 北国や秋霖時に音立てて 同
 落葉道我が花道として一步 神戸 和田華凜
 楽屋出づ役者の素顔石路明り 同
 祇王寺のさらなり紅葉かつ散りて 同
 鼯鼠も鼯鼠も留守神の留守 東京 田丸千種
 神の留守御酒の被れるうす埃 同
 蒼天の無音一羽の鷹を呼ぶ 同

雀とは別な空より小鳥来る 龍ヶ崎 今橋眞理子
 風残し色鳥去つてしまひけり 同
 黄を極め赤を深めて冬紅葉 同
 今朝の冬山気の芯の固くなり 神戸 涌羅由美
 千年の杜のため息帰り花 同
 太陽といふ手品師に青写真 同
 露草のぼらばらに整つてをり 同
 コスモスに風の指つきつき触るる 同
 澄む水が広野の果てでありしかな 同
 輪郭のぼやけも味と青写真 大阪 酒井湧水
 移ろへるいのちの跡や青写真 同
 追ひつけぬ恩師の背中嵐雪忌 同
 神の嶺より秋水となり来る 熊本 岩岡中正
 生涯をめとらぬ子規を祀りけり 同
 炉開といふ母ませしころのこと 同
 板壁の木目つつまじ秋の雨 川崎 栗林圭魚
 なめらかに秒針廻る秋思かな 同
 毬割れて日差しを得たる栗の照り 同
 虫の窓開ければ夜の流れくる 袋井 湖東紀子
 こぼれ敷く白萩浄土ありにけり 同
 颯風の去つて真赤に暮るる空 同
 柿の里知らぬ里さへ懐かしく 神戸 山田佳乃
 谷深いいつも濡れぬる椿の実 同
 この坂にバス停ふたつ秋時雨 同

雑詠句評（二月号より）

虚子のこと子規に聞きたし瀬祭忌 東京 山田閨子

虚子の子規への傾倒と、虚子への子規の熱心な指導から始まった二人の関係には、虚子という俳号まで貰い、師弟愛とも友情とも取れる深い結びつきがあったことは確かである。

双方の書簡からも伺える事件ともとれる出来事から、二人の心は付いたり離れたりして、複雑な心持しが絡む間柄だった時もあった故、互いの人格や才能を深く理解しえたのでしよう。

後世の者にとっては、その所をもう少し深く知りたい、聞いてみたいと思うのです。作者は虚子についてもよく研究なさっているのです、何か不明な所があったのかもしれない。瀬祭忌に当たり、子規を偲び、虚子を偲ぶ作者。「老いて尚君を宗とす子規忌かな」が、伝えるものを考えてみたいと思う一句。（雅）

虚子を知る人は未だ現役で活躍しておられる方も何人か居られるが、子規となると当然皆無である。高濱年尾も、子規が名付け親であったが、明治三十三年生れで、記憶に無いだろう。そんな子規に、虚子の事をお聞きになりたい作者。子規忌ならではの祈りにも通じる心が描かれている。（廣太郎）

月の名を追ふみほとりの旅靴 宝塚 水田むつみ

月は春の花、冬の雪とともに日本の四季を代表するものの一つである。言うまでもないが、月が秋の季節とされているのは、秋には空が澄んで、月が大きく明るく照りわたるからであろう。古くは月は生活の礎であり、月を目安にして時を知り、月あかりを頼りにして暮らしていたのである。

秋の月は日を追うごとにその呼名を変えてゆく。長旅の途中なのであるうか、作者はいつも持ち歩く旅靴といっしょに日々変わりゆく月光や月影を満喫しているのであろう。みほとりの旅靴も新しいものではなく相当に使慣れたもののようにうかがえるのであるが如何であろうか。それともこの句にはもっと深い心情が込められているのであろうか。（紀元）

陰曆八月の満月をピークとして、新月からだんだん育ってくる月は季節としてその名を変えながら古今詠み人に愛でられて、作者も俳人として忙しく旅を続けておられるのである。満月を過ぎても月は季節として詠み続けられる。作者の大切な伴侶である旅靴を通して季節感が漂ってくる。（廣太郎）

天地有情

子選

僧もまた若きに継がれ西虚子忌
 一会果て辞す峰寺やそぞる寒
 一鉢に筍現るる刹那かな
 里若葉生家遠退くばかりかな
 秋風の一人にひとつづつ余生
 生きてゐることが一番天高し
 老夜学虚子の全てをまだ知らず
 老夜学万年筆に贅のあり
 菊花展紫幕ときどき風孕み
 重石とし置く一鉢も菊花展
 句を選ぶことも夜なべと思ひつ
 コスモスや火を噴く山を遠く置き
 真紅でもなくて紅秋さうび
 パソコンの音のひびける夜寒かな
 風と来て色鳥の声聴き難し
 落葉踏む音に誘はれ山歩き
 秋声や紫式部 偲ぶ寺
 この後の事も聞きたし温め酒

長岡 安原 葉
 同 稲畑廣太郎
 東京 同
 熊本 岩岡中正
 同 相模原 木村享史
 同 神戸 三村純也
 同 東京 今井千鶴子
 同 同 山田閨子
 同 淡路島 高田非路
 同 鎌倉 星野 椿
 同

竜胆の薄日引き寄せ閉ぢにけり
 夕されば独りの暮らしそぞる寒
 色あせぬ意志の横顔獺祭忌
 健啖も母在ればこそ獺祭忌
 俳諧はいつも初心よ真弓の実
 鳥渡る天の奥より湧き出でて
 母許へ野山の錦辿りつつ
 新涼や心の張りを取り戻す
 外国の帰省叶はぬ子と電話
 家揺すり吾を揺すりてはたがみ
 しぐれ忌やみちのくの今いかならん
 初霜やそぞろ 信濃の旅心
 都心歩し人にまぎるる宵の秋
 大山へこの道秋の辻地蔵
 日の志摩の南ヶ丘に避寒かな
 マスクしてものを云はざる人となる
 橋渡り押し寄せてくる紅葉かな
 少し酔ひ紅葉溪より戻りけり

仙台 赤川誓城
 同 高知 橋田憲明
 同 神戸 和田華凜
 同 宝塚 水田むつみ
 同 横浜 小川龍雄
 同 神戸 山西商平
 同 千葉 大木さつき
 同 群馬 中杉隆世
 同 神戸 浜崎素粒子
 同